

自主シンポジウム20

急速に変わりゆく子ども達への保育のあり方

—保育展開、保育者のかかわりを中心に—

企画者・司会者	関口はつ江（十文字学園女子大学）
話題提供者	堀合文子（十文字幼稚園）
	田中三保子（お茶の水女子大学（非））
	松田彌生（雑司ヶ谷幼稚園）
	高木友子（湘北短期大学）
指定討論者	小田 豊（国立教育政策研究所）
	上垣内伸子（十文字学園女子大学）

企画の趣旨

保育現場では「今のこどもは前の子どもとは違ってきている」ことは実感されている。親の子育ての意識、養育環境や養育方法、子どもを取り巻く自然的社会的環境の変化による子どもの体験内容の変化等、子どもの育ちに影響する多様な要因の変化は急速であり、子ども自身の発達状況の変化は当然である。一方保育の場においてその変化に適合した対応がなされているであろうか。園環境の構成、カリキュラム、保護者への支援などいわば保育におけるハード面に関する検討は活発であるが、子どもに最も直接的な影響をもつ具体的な保育の進め方、保育者の子どもへのかかわり方（いわばソフト面）については、現代社会特有の環境の中での育ちの特性を念頭に置いた議論は十分行われているであろうか。

これまでに発見され、伝えられてきた保育法が保育の常識として定着していることが、目前の子どもの状態に即する柔軟な保育への展開を妨げている面も大きい面も考えられる。今の子どもの育ちの特徴はどのようなことか。その子どもの育ちを助ける保育とはどのような保育なのか。どのようにして、常に子どもの状態に気づき、新たな発想をもって子どもに即することができるようになるのか。長年の保育経験をお持ちの先生方の提言を中心にこの3点について討論し、子どもに即する保育について掘り下げたい。

保育の原点と時代の影響

堀合文子

社会は急速に変化し、進行中です。これが現代でしょう。私も幼児の1年毎の変化に驚かされ、悩まされてきた保育者の一人です。まず、保育者としてはその変化に気が付かなければならないでしょう。おかしいとも思わず、幼児の反応に気が付くよりも

次々と指示したり、命令したり、自分の計画を進行することに一生懸命で、幼児の反応が見えない場合が多いのではないのでしょうか。“何かがおかしい”と、感じる事もなかなか出来ない時代となってしまったようです。私共は保育者として幼児の生活の中にも表われているその変化を早く関知し気が付かなければなりません。これに対処するには常に幼児の生活状態、行動をよく見て、考えてゆく態度が保育者には必要ではないのでしょうか。幼児を成長させるためには先ず遊ぶ生活を大切に、それをくずさないでその中で必要に応じて指導してゆく事が大切ではないのでしょうか。

一人一人皆違っているのは当然で、そこにあらわれる幼児の生活、行動も皆違っております。保育者が幼児にかかわるかかわり方も一人一人違うのです。前述したように、社会も、その中で生活する幼児も急速に変化して来たので一人一人を大切にするのはなく、これは幼児教育の原点です。但、急速にかわる現在ではこの事は忘れられておりますが、現代の幼児こそこの事が要求され、必要です。保育の現場で、幼児に対しての実践は各保育者が幼児を見て考えてゆくのがこれ又保育者の使命です。保育のあり方が急速にかわるのではなく、幼児教育は昔より現代まで一貫したものがあります。「急速に変る」を、幼児にとるか、保育にとるか二通りありますが、原点を考えれば両方に共通することです。

変わりゆく子ども

田中三保子

今どきの子どもたちは、少子化の中、親の「こうあってほしい（ほしくない）」思いを一心に受け、ものだけはたくさん与えられて育ってきているように思われる。小さいなりに試行錯誤する機会とは与えら

れず、親の意向に背かないように、許される範囲内でそこそこに自己発揮しながら生きているようにみえる。幼稚園でも、ものがあれば遊ぶことができるし、羽目を外すこともない。保育者が自分に対しどのような期待をもっているのか、どの範囲なら許容するのかを、遊びながらも常に推し量っているようにみえる。かつての子どもたちにも、こういった傾向がなかったわけではない。でも、ここでは自分のやりたいことが実現できるとわかってくると、思い切り自己表現できるようになっていった。硬い殻の中に閉じこめられてきたように思える子どもでも、保育者に励まされ、まわりの子ども達の自己発揮の姿に触発されて、時には大人に反発も示しながら、本来の自分の姿を取り戻していった。

今どきの子どもたちは、大人は自分達を規制するもの、幼稚園も規制の質が違っただけと捉えているのではない。しかし、自分でもよく分からないやりたいことを一緒に探り、当てて、その実現に手を貸してくれる人がいる、実現の喜びを分かち合ってくれる人がいる、という思いの積み重ねが、子どもの自己発揮を促すのだと思う。今どきの子どもたちは自己発揮に時間がかかるが、その間も子どもの心は動いている。何もしないできないようにみえるときでも、子どもの内面は動いている。できるようにと大人の価値観を押しつける前に、子ども自身の力を信じたい。子どもの内なる声に耳を傾ける努力をするとき、子どもは大人が思いもよらなかった力を発揮する。それは子どもにとって自己発見、次への自信となる。保育者は外から見える形にこだわるのではなく、子どもが実現しようとするもの、表現する過程をもっと大切にしなければならない。

社会の中の子どもたち 松田彌生

3歳時、ことばは達者だがグルグル（メイロ）しか絵を描けなかった年長組のKくん、熱心に遊具を片づけている。だが、離れて立つ園長に視線がチラチラ。見てないとしらない、と担任は言う。AくんがBをそそのかしてKをいじめさせる、とK母が教師に善処を求めた。しかし、Aに限ってありそうにないと全教師が見る。翌日、KとAが仲良くじゃれて遊ぶ場面にK母の注目を促す。が、しばし向き直っても隣人と話し続けて目を留めず……。転入して半年のJちゃん、6歳。仲間の告げ口が止まない。遊びこめず、絵も製作も中途半端で放り出す。有名小ねらいの塾通いで早退もしばしば。本人が好きで

やっています、と母。Jは、同輩児ではなく、よく3歳児と遊んでいる。

上記のどちらの親も、一見もの分かりが良く穏やか、強要型には見えない。いま日本の学校・社会では、なぜと考える思考の過程は省略して、結果があっているかいないか、正答の数はいくつか、を重視し競う傾向が強い。この競争に勝ち抜いた者が上級・有名校へ進むシステムである。そして子どもは、賢い子ほど親・教師の目を先取りし、この傾向を拡大再生産している。様々な失敗を含む豊かなナマの体験を重ねること。今の子どもの発達にこれは不可欠であろう。

子どもと養育者の関係の変化 高木友子

子どもは親に愛されたいと願い、幼い頃から親の意をくみ取り、親にとってよい子であるように振る舞う。今の子どもたちはこの傾向が強まり、愛されたいというよりも親に嫌われることを恐れているかのように見えることもある。家庭ではよい子であり、園や学校ではむしろわがままな振る舞いが見られる子どもたちをよく見聞きするようになった。孤独を感じる子どもや、自己表現ができないかと思うと行き過ぎた自己主張を始める（キレル）、という極端から極端の自己表現しかできないタイプの子どもの数が増えているという心理学領域や保育領域からの報告もある。何が子ども達を変えたのか。子どもたちは満たされていない、受け止められていないと感じている。これは必ずしもネグレクトの対象となっているような被虐待児の話ではない。物質的に恵まれ、教育熱心な家庭の中にも満たされない子どもたちがいる。このような子どもの養育者たちの目には子どものありのままの姿が映らない。彼らが見ているのは彼らが望む子どもの理想像である。そして、子どもたちをそう「作り上げて」いこうとする。これは子どもの数が減り、一人の子どもに親の期待が集中しすぎるためかもしれないし、養育者たちの子どもの自然な姿についての知識が少なすぎるためかもしれない。彼らは子どもが自分の思い通りにならなかったときにストレスを感じる。子どもたちは養育者の理想に沿うべく、努力する。ありのままの自分では受け入れてもらえないかもしれないと恐れている。このような子どもたちの思いを解き放ち、本来あるべき自然な姿を取り戻すために今、保育が如何にあるべきかを参加者の皆様と考えていければと思う。